

発掘ニュース

第 7 号

昭和 59 年 2 月 9 日

発行 財団法人 いわき市教育文化事業団

龍門寺遺跡

龍門寺遺跡発掘調査は、昭和57年8月に始まり昭和58年7月で現地調査を完了しました。調査の結果、縄文時代から江戸時代までの貴重な遺物・遺構が検出されたことは、「発掘ニュース」第1号～第6号と「龍門寺遺跡現地説明会資料」さらには「龍門寺遺跡の概要」などで紹介したとおりです。おもな遺構として、竪穴住居跡24棟（弥生中期2棟・古墳前期7棟～中期3棟～後期3棟・平安前期9棟）、土坑4期（縄文早期3基・弥生中期1基）、古墳8基、井戸跡11基などがあげられます。遺物は弥生土器が最も多く、縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器・金属製品・木製品・石器・石製品・自然堅果類など多数出土しました。

調査によって得たこれらの成果は、詳細な記録のもとに報告書としてまとめられます。貴重な祖先の遺産を後世に伝えるものは、もうこの記録しかありません。文化財を大切に。今、ハツ坂トンネル工事が盛んな頃、綿密に報告書づくりが行なわれています。最終号となった今回は、報告書を作成するためにかかる仕事の一端を紹介します。



とじておきましょう



遺物が図化されるまでの過程を紹介します。

1. 出土したすべての遺物を柔らかい歯ブラシなどで、丁寧に水洗いする。



2. 日陰で良く乾かしたのち、すべてに①遺跡名・②出土地点・③遺物番号を記入する。

(例: $\frac{RME5P1}{\textcircled{1} \quad \textcircled{2} \quad \textcircled{3}}$)



3. 保存を良くし、接合面を強化するために、おもに脆弱な土器などをバインダー液に浸す。



4. 廃棄あるいは二次的な圧力によって、完全なかたちで出土する遺物は少なく、接着剤(セメダイン)で根気よくつけ合わせる。

5. 接合しても完全なかたちにならないときは、足りない部分を石膏で復原する。



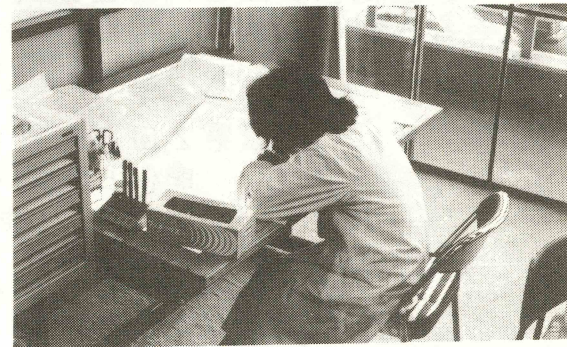
6. 遺物のかたちや大きさを三角定規・コンパス・デバスターなどを使って正確に計測し図化する。



7. 実測と併用して、細部の文様や成形手法の痕跡などを拓本にする。



8. 実測した原図をトレースする。



龍門寺遺跡資料に学術的息吹きを!!

いわき市文化財保護審議委員 馬目順一

理由の如何を問わず、破壊される遺蹟は「記録保存」と称して、考古学を専攻する研究者を担当者に任じ、事前の発掘調査の必要性が立法化されている。いわき市は、この研究者を職員として備し、財団法人いわき市教育文化事業団を先年発足させ、行政的に発掘を進めているが、50人に近い作業員を動員し、連日調査に精進する龍門寺遺蹟もこの例である。

縄紋時代から江戸時代におよぶ貴重な資料が日毎に勿出するのを見聞し、市内の考古学的事情を知る拙にとっては非常な驚きを感じている。この驚異とは、縄紋時代草創期の低位丘陵に位置する関東的な在り方、農耕社会への転換を具現化した新形式設定の可能性を含む弥生時代中期土器、日本において初の階級社会を確立した古墳時代前期の土師器、中央集権の律令社会に彩られた平安時代において鎧帯を佩用した官人、領国支配による小地域化が確立したなかでの室町時代後期の貿易陶磁をめぐる商人、身分化が絶対視された江戸後期における国産陶磁をめぐる新流通機構、などの諸問題は龍門寺遺蹟の調査を通じて、はじめ、激しい煮沸を見たものだからである。ここにおいて、調査者としての職員は行政的処置任務とは別に、学問的責任を学界に対し負うことになる。

精華な造本になるであろう龍門寺遺蹟調査報告書も、この分では目方で計れるほどの大冊となろう。しかし、そこには巨額を投入し、微に入り、細にわたる野外調査の成果が十分に生かされ、遺構と有機的関連をもつ遺物の型式学的吟味と分析が盛り込まれていなければならない。この関門を通過するには、焰と燃える学究的精神に裏打ちされた日々の弛まざる考古学的訓練以外に、その特効薬的免符はない。与えられた材料がどれほど素晴らしいものであ、たとしても、それを調理する人々がもつ知的腕力の如何によっては、その料理は美味にもなり、貧相な不味にもなる。歴史的復原の素材としての史料化を目差し、考古学界に誇示しうる調査と科学的な報告書の刊行を期待したい。こうした諸点を咀嚼しつつ、大詰に近づいた龍門寺遺蹟の調査に対処して欲しいと思う。

(1983年春)

〈第2回ふるさとの考古資料展〉

開催日 昭和59年2月25日—3月4日

場所 いわき市文化センター(2F)

〈第26回福島県考古学会〉

開催日 昭和59年2月25日(土)・26日(日)

場所 いわき市文化センター

